

	噴火と地震名称	和暦日付	地形変化の状況
第1段階	1 前駆地震群	寛政三年 十月八日～ 1791.11.3	十月八日（11月3日）より地震が始まり、以後毎日3～4回、地鳴りを伴う。
			小浜方面では最も強い揺れで、震度Ⅴ～Ⅵに達する。 十一月十日（12月5日）、餐串（ひんぐし、小浜町）で番小屋にいた老天婦が落石に打たれ押しつぶされた。
第2段階	2 善賢祠前の噴火	寛政四年 正月十八日～ 1792.2.10	正月十八日（2月10日）に大きな地震と山鳴りの記録有→善賢祠前の噴火開始。
			正月十九日（2月11日）には噴煙上がる。 火山灰は四方に散り、数里四方の草木は雪霜をかぶったようになる。 正月二十一日（2月13日）には噴煙は衰えるが、鳴動は往日の倍である。 湯気が噴出した所は沼のようになり、五・六尺ずつ湧き上がる。
	3 穴迫の噴火	寛政四年 二月六日～ 1792.2.27	琵琶の首（びわのぼち）、現穴迫谷（あなさこたに）の谷頭で二月六日（2月27日）午前10時、かなりの積雪の中で噴火。
			二月八日（2月29日）の夜中以降は溶岩がゆっくりと流下する。この様子は槽木山・路木山（ろぎやま）より安全に見学できた。 穴迫谷の溶岩流は「焼け」「焼け岩」とよばれていた。
	4 蜂の窟の噴火	二月二十九日 1792.3.21	蜂の窟（飯洞岩の下の窟み）より始まった溶岩は1ヶ月程して「びわのぼち」から溶岩の一緒になって穴迫谷を静かに流れた。
	5 古焼頭の噴火	閏二月二日 1792.3.24	古焼（鳩の穴の少し上から噴出したような小規模溶岩流）の噴火口から硫黄の煙が噴き出る（スコリアや溶岩の噴出はない）。
	6 新焼溶岩の流下	閏二月三日	閏二月三日（3月25日）からゆっくりと流下し、三月朔日（4月21日）には、流下をほぼ停止した（平均流速30-35m/日）。
7 噴火に伴う諸現象	二月二十七日 1792.3.19	三奈村の礫石原（くれいしぼる）で酸味の強い炭酸泉が湧出した。（1663年の古焼溶岩噴出のときも同地点から湧出があった）	
第3段階	8 三月朔地震群	三月朔日 1972.4.21	三月朔日（4月21日）夕刻より地震、山鳴り頻発、島原で震度Ⅴ～Ⅵ、守山で震度Ⅳ～Ⅴ 眉山（天狗山）から巨大な岩石が土煙をあけて転げ落ち、木々が次々となぎ倒された。 震度Ⅴ～Ⅵの地震が8回程度繰返し起きた。
			今村集落（島原大変で埋没）で地割れが激しい。 安徳村南名で地割れがあった他、域内などで地下水脈に変動あり。
	9 楠平の地すべり	三月九日 1792.4.29	三月九日（4月29日）深夜0時過ぎの強い地震をきっかけとして南北720m、東西1080mの楠平が東方向へ滑り落ちた。滑落崖は90mもあるかのように見えた。 山裾より滑り始め、2段に分かれて地すべりを起こした様であった。
10 今村の地下水位上昇	三月中旬頃 1792.4	楠平前面（東側）の今村地区の六助がふいごを吹いていたが、温度が上がらないため、中をのぞくと割れ目があり、水が逆流しているのが見えた。	
第4段階	11 四月朔地震 眉山山体崩壊	四月昨日 1792.5.21	四月朔日（5月21日）20時過ぎにM=6.4±0.2の地震が発生。これにより眉山（天狗山）が山体崩壊を起こし、島原城下町の南側を飲み込んだ。 有明海沿岸に大津波が押し寄せた（半島北部では3波との記録がある）。 津波の水温は平時より高く、島原城下では「あつき」程度、守山方面では「温み」程度であった。 上の原の者がいた菜種の刈り置き番屋がそのまま1500-1600mも海中に押し出された。 立ち木を載せたまま山が滑った。 楠木平の上、南の方が崩れ、安徳村は過半が土石の下になり、中木場村も北の方が同じ被害を受け 松島と茸山の間「小深り」は埋め立てられ、地続きになった。 眉山の東側の海岸線は約1kmも前へ出た。
第5段階	12 島原大変以降 続く地震と湧水変化	四月五日～ 四月十日～ 1792.5.30	島原城下から半島北部にかけて強い地震があり、海鳴りがした。 上の原に自噴井を生じ、現在よりも大きい白土（しらち）池ができたほか、上の原・万町の湧水は絶えず、数万人の用水に足りた。
		～ 1792.6.17	眉山には六筋の堅割れ（谷）ができ、急崖の中ほどにある数ヶ所の穴から泥土が噴き出し、煮えるような音がしていた。
13 善賢岳再噴火と冷え まった溶岩の崩壊、 眉山二次崩壊	六月朔日 旬 1792.8	善賢岳山頂で再噴火、煙は最初はよりも軽い、音は大きく激しい。 地震の度に眉山が二次崩壊を起こす。冷え固まりかけた溶岩も少しずつ崩れる。	